

利殿と申諸人の尊敬に逢たる侍も主人の家潰れ候へば、今程本多平八組に成り、松下一黨、白坂一黨の者共は、下野をへつらい被居候、信玄鋒さき盛の時は、甘利殿など如此あらんとは、夢にも思はざる事に候、是偏に勝頼の無分別故、長篠合戦より八年目家滅亡致し、歴々の侍さへ右之通りに罷成候、殿にも今度長閑が薬御附被成間敷と被仰候得ば、何れの道にも大將の無分別は同然にて候と、段々道理をくどき立涙を流して被申上候へば、家康公御心得被遊、此上は其方申通御療治被遊べくと被仰出候故、長閑罷出、御薬を指上候、御灸をも雙六の筒の大サに致シ、作左衛門自身三火迄すへて進上仕リ、御内薬をも被召上候處、其夜半に御腫物吹切、膿水夥敷出申候時、作左衛門聲を揚て嬉し泣になき申候、本多佐渡も同然之由、其後御腫物頓て御平愈の由也、

○按ズルニ、家康ノ腫物ノ事、武徳編年集成ニハ疔ト爲シ、岩淵夜話ニハ根太ノ如キモノト爲セリ、

〔筆のすさび三〕一奇病 此頃友人小寺清光がかける記事を見るに、其事奇なるに依りて左に云

文政五年夏、本邑篁後巷文助といふ者癰を患ふ、六月二十四日、癰潰れて二鱖魚あり、膿血に隨ひて出づ、癰亦稍く愈ゆ、其子茂平異みてこれを語る、以て文助に問ふに、曰信なり、其長さ寸餘、尾ありて首なし、鱗鱗並に全し、蓋是嘗て此魚を好む、其砂礫多きを以て、皆其頭を去る、然れども已に食せざること數月、今出で、鮮且全きは何ぞや、予文助の言を聞き、益其異を嘆ず、夫熟して後これを食ひ、糜してこれを咽む、安ぞ鮮且全を得んや、人の腹中食を受くる所あり、また何ぞ背よりして出づるを得んや、稗官小説或は恠疾を載せて、未だ斯類の事あるを聞かず、是によりてこれを觀れば、世の奇恠非常を傳ふるもの概して妄誕とすることを得ず、文助少して我に備す、故に其事を詳にするを得たりといふ、備中笠岡小寺清光記す、